



## 第3章 浪江のこころプロジェクトの 歩みを振り返る

全国の取材協力者の皆さんとの協働により進められてきた「浪江のこころプロジェクト」。長期化した避難生活や先が見えない不安の中、町民の皆さんがどのような想いで生活し、ふるさとへの想いを抱いているのかを発信し、互いの心をつなげていくため、『浪江のこころ通信』の取材・編集活動を行ってきました。

「広報なみえ」の発行再開に合わせて平成23年7月に発行された第1号から、最終号となった令和4年3月の第119号まで、『浪江のこころ通信』には計466件の記事が掲載されました。

令和3年度をもってプロジェクトが終了することに伴い、町の復興とともに歩んできたプロジェクトの経過を振り返り、この11年の経験を未来に向けてどう活かしていくか話し合う「取材協力者情報交換会」が令和4年2月に開催されました。この章では当日の議論の様子を紹介します。

# 浪江のこころプロジェクト 令和3年度 取材協力者情報交換会

## とき

令和4年2月1日(火)  
10時～12時30分

## ところ

Zoomミーティングによる配信

## ● 配信会場

やすらぎの宿ホテル双葉の杜

(浪江町大字幾世橋字田中前8)

## 進行

櫻井 常矢さん

浪江のこころプロジェクトプロ  
ジェクトリーダー／高崎経済大  
学教授

## 参加者

### ● 取材協力者 ●

佐藤 伸博さん はっぴーでりっち(北海道)

谷津 智里さん Bottoms(宮城)

青木ユカリさん コミュニティ・ワークス(宮城)

畠山 順子さん NPO法人あきたパートナーシップ(秋田)

結城 健司さん 復興ボランティア支援センターやまがた(山形)

(NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル)

古山 郁さん 認定NPO法人市民公益活動パートナーズ(福島)

松田 英明さん 認定NPO法人市民公益活動パートナーズ(福島)

鍋嶋 洋子さん 認定NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ(千葉)

石井 悠子さん 認定NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ(千葉)

竹内 瞳さん ひろしま市民活動ネットワークHEARTtoHEART(広島)

佐々倉玲於さん 一般社団法人いなかパイプ(高知)

彌永 恵理さん NPO法人つなぎteおおむた(福岡)

下地 美香さん NPO法人まちなか研究所わくわく(沖縄)

宮道 喜一さん NPO法人まちなか研究所わくわく(沖縄)

### ● 浪江町役場 ●

佐藤 良樹 浪江町副町長

関根 涼太 浪江町役場企画財政課情報統計係 主査

### ● 事業コーディネート ●

高田 篤 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(宮城)

本田 律子 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(宮城)

## ◆開会挨拶

**佐藤副町長** 浪江のこころ通信は、全国各地に避難されている町民の様子や活動について広く皆様に共有できるツールとして、町民どうしの絆維持の一翼を担っていただきました。この11年間ご協力いただきました皆様に改めて感謝申し上げます。

浪江のこころプロジェクトを通じた広報への記事掲載は450件を超え、多くの方の声を共



佐藤 良樹 副町長

有してきました。しかしながら、避難生活が長くなるにつれ、その土地の生活に慣れ定着する町民も増えてきました。また、昨今の新型コロナウイルス感染症の影響もあり、通信の取材を受けていただける町民が少なくなってきています。

そのような状況を踏まえ、櫻井プロジェクトリーダーとも相談し、この浪江のこころプロジェクトを今年度をもって終了させていただくこととなりました。本事業は終了となりますが、避難者に対する支援は今後も継続してまいります。引き続き、皆様のご支援ご協力をよろしくお願いたします。

## ◆町の復興と町民の「暮らし」の変化

**櫻井** 浪江のこころプロジェクトには、2つの考え方の柱がありました。ひとつは、全国に離ればなれになった浪江町民それぞれの想いを共有していくことです。

平成23年4月に「浪江のこころ通信」の企画書を二本松市東和支所内にあった浪江町役場に最初に持参した際、企画書には「浪江町に帰還することを目指して」という文言が入っていました。しかし、通信がスタートして1〜2か月の間で、それが間違いであることに自分で気づきました。帰還を目指すことを目標にするので



櫻井 常矢 プロジェクトリーダー

はなく、今、個々の町民がそれぞれの場所でのんな想いで生活し、過去をふり返ったり、これからのことを考えたりしているのか。そのことを共有する環境づくりにこだわるべきだと。そう捉え直して再スタートした経過がありました。

もうひとつの柱は、協働型復興、協働型プロジェクトであるということです。浪江町役場（行政）と私たち民間の協働の取り組みであることが重要でした。民間側で自由に取り組むのであれば、このプロジェクトをやめる必要もなかったのかもしれませんが、協働型プロジェクトですので浪江町役場の想いと私たちの想い、

理念を共有しながら前に進んでいくことが大切と考えていました。

10年以上の時間が経ち、町内の復興事業や町への帰還を進めていくことが町行政としての中心課題になってきています。その中で、このプロジェクトの理念、協働の形も少しずつ変化してきている。そうしたこともまたプロジェクトが終了を迎えた理由なのだと考えています。

さて、今後とも町が持続していくためには、生業の部分の復興が大切だと思います。町内の復興状況や今後の展望について、副町長としてのどのような想いを抱かれているかお話しただけです。

**佐藤副町長** インフラの復旧については目に見える形で進んでいます。町全体としては、復興は道半ばの状況と考えています。復興のスタートラインには立ったが、そこからどれくらい進んだかまだ実感できないのが現状です。

現在の復興の課題として、まずは町全体の8割がまだ帰還困難区域となっていることがあります。帰還困難区域の一部で除染が進んでいますが、これをどう広げていくかについてはまだ決まっています。

2つ目の課題としては、浪江駅周辺の市街地の復興があります。駅前には、まだ建物が撤去されたままの状態、開発は手つかずの状況です。このエリアの再開には予算面も含めて大きな労力がかかってくるのが予想されます。

農林水産業についても課題があります。まず、林業については除染が全く手つかずの状況です。農地については、震災前は約1,900haの面積がありましたが、昨年の段階で営農再開したのは279haに留まっています。農地がきれいに管理されていたり、稲が実っていたりといった景色が目に見えてこない、農業が復興してきたという実感にはつながらないでしょう。

人口面では、令和3年12月末時点の町内居住人口は1,788名となっており、これは震災前人口の8%をやっと超えたところです。居住人口のうち帰還した町民は1,260名で、震災前の6%程度に留まっています。今後なかなか帰還が進まないことを前提にして、居住人口や交流人口をいろいろな形で増やさないとけないと考えています。

**櫻井** 役場の周辺については、ホテルやスーパー、道の駅もでき道路整備も進んでいます。ただ、そこを少し離れると、人の営みがまだ見えにくいですね。町の第1次復興計画では、町の帰還人口の目標を5,000人に設定されています。約11年が経った今でも、そこには大きく届かず、町としてもまだ厳しい状況にあると言えます。

佐藤副町長は浪江のこころ通信だけでなく、県外避難者支援を担った浪江町復興支援員事業の指揮もとられてきました。全国に離ればなれになった県外避難者に寄り添うことの意味や大変さを感じてこられたかと思えます。そうした

副町長から見て、浪江のこころ通信はどのような役割を果たしてきたのか、町民にとってどのような存在であったのか、副町長としての想いをお話いただきたいです。

**佐藤副町長** 震災後、広報紙の再開とともに、浪江のこころ通信の掲載が始まりました。当初は、同じ行政区の方や知人が掲載されているのを見て、連絡を取りたいといった問い合わせがたくさんありました。誰がどこに避難しているのか、という情報を届ける役割が当初は特に強かったと思います。

その後、避難先の生活がやや落ち着いてきても、町の復興がなかなか進まない、過酷な避難の状況が変わらないという時期がありました。そのような時期に、取材を受けられた皆さんも笑顔で載っていました。取材という時間が、一時心が和む時間だったのでないかと感じ、印象に残った記憶があります。

**櫻井** 確かに私も取材のときは「笑顔の写真で」と言っていたことがあります。でも、ある取材の時、約2時間、話しながらずっと涙を流されていたご夫婦がいました。そのお2人の写真を笑顔で撮ることにはならなかったのですが、それでもいいのではないかと思つた記憶があります。ひとは悲しみを共有するだけでも元気になれるのではないか。自分たちだけが悲しんでいるのではないということも共有することも大切



市民公益活動パートナーズ (福島)  
古山 郁さん

なことなのだ、そのようなことも学ばせていただきました。例えば、浪江の復興状況を強調する町の広報紙を見た時に、それを素直に喜べる人がいる一方、自分も帰るべきだったのではないかと思いつつもいる。情報の受け止め方は、私たちが考えている通りにはいかない、複雑なものであると思います。

### 古山(福島)

福島県内に避難されている方の暮らしを見ると、活発に明るく前向きになっている方はまだ少なく、ひっそりと暮らしている方が多いと感じます。故郷が近くにある故に、帰れない現実がまざまざと感じ取れるからなのかもしれません。近所の人からは、口を開けば嫌なことを言われることもあると聞きます。そういった中でコミュニティをどう編みなおしていくのか、まだ

難しい状況が続いていると思います。取材でも、帰還困難区域から避難されている方の中には「未だに故郷に帰れない」ということを何度か何度もおっしゃる方がいます。町の



ちば市民活動・市民事業サポートクラブ (千葉)  
鍋嶋 洋子さん

一部は帰れるようになり、にぎわいを取り戻していていることと、自分の故郷の状況との違いを切々とお話されます。取材していても、どう話を進めて行けばいいかわからない、そんな感じを受けたこともありました。

### 鍋嶋(千葉)

私たちの団体が、被災者支援・被災地支援の事業に取り組みきっかけとなったのが、このプロジェクトでした。被災した方から直接お話を聞き、想いとニーズを聞き取り、支援したり他に繋げていったりといったことが、取材活動を通じて始まっていきました。

私は、この震災がなければ浪江町との縁はありませんでしたが、取材を通じてお会いした一人一人の顔が、今でも自宅の様子とともに浮かんでいきます。自然が豊かで、家の周りを散歩すれば海も山

もある。魚も獲れてきのこも採れて、といった震災前の豊かな暮らしのお話から、震災を受けられた避難体験の話から、今の話まで、その全てを伺う機会は、この通信の取り組みがなかったら、

得られなかったと思います。

3年くらい前に、神奈川から浪江に戻られた70歳代前半の方の話を再取材でお聞きしました。浪江町に自宅を建てて帰ったら、やっぱり空気が違う、ここが自分の家だとおっしゃっていました。ただ、周辺で帰っている方は皆さん高齢で、自分たちが一番若い。10年後、この暮らし、自分たちの暮らしはどうなるのか、と話されていました。

役場周辺は人の暮らしが感じられますが、そこからちょっと外れると、更地になって歩いている人もいないという状況です。復旧・復興が点であって面になっていないということでしょう。故郷に帰りたいとおっしゃっている方に、「帰るといいよ」と簡単におすすめすることはまだできない状況かなと感じています。浪江に帰られた別の方からは、今でも時折電話をいただきます。さみしいと感じた時に、町

では周りに話す相手が誰もいないとのこと。福島県外で10年かけて生活を再建してさみしさを感じている方もいるし、故郷に戻っても孤独やさみしさを感じている人もいます。そういったそれぞれの想いに触れるきっかけをいただいた、この事業にはとても感謝しています。

### 櫻井

プロジェクトが10年以上続く中で、帰還した方・しない方・したくてもできない方などそれぞれの暮らしの変化を受け止めようとした事業だと思えます。町への帰還が始まったとき課



あきたパートナーシップ (秋田)  
畠山 順子 さん

秋田県内には、浪江町から避難してきている方が多くいらっしゃいます。通信の取材は避難後が多かったのですが、その当時は、怒りとか悩みをどこにぶつけたらいいのかわからないという想いが伝わってききました。その後年月が経って、子どもたちが大きくなって、それぞれの生活の中

題になったのが、町民の分断を防ぐことでした。それまでは、みんな「帰りたくても帰れない」ということで共通だったものが、帰還が始まった瞬間、帰る人・帰らない人という分け方をされてしまう。そうした分断を進めてはいけないと話していたことを思い出します。帰還したとしても課題もあるし、帰れない人たちにもいろいろな想いがあるって、今もなおそれをどうつないでいくかということが課題であることを改めて感じました。

**畠山(秋田)** 秋田県内に拠点を置いて、秋田・青森・岩手の3県に避難されている方々の相談対応等をしています。

秋田県内には、浪江町から避難してきている方が多くいらっしゃいます。通信の取材は避難後が多かったのですが、その当時は、怒りとか悩みをどこにぶつけたらいいのかわからないという想いが伝わってききました。その後年月が経って、子どもたちが大きくなって、それぞれの生活の中

入っていく中で、少しずつあきらめながらも、それではだめだと頑張ってきているのだと思います。

実際、避難生活が長くなって、あきらめを感じている方もいます。そういう気持ちを受け止めて聞いてあげる相手が必要ですが、それがいつまでも私たち支援者ではなく、近所の人とかサークルの友達とか、そういう繋がりも必要になっていくのだと思いますし、そうしたつながりを自分で探すことができる人も出てきています。

怒りが静まっているわけではないけれど、それでも地域とつながっていかないといけないと思う人は増えてきていると思います。中には、自分たちでサークルを立ち上げたり、前向きな活動をされたりする方も出てきています。震災後、お世話になったから、ということ、秋田の活動に寄付していただいたり、コミュニティ食堂のお手伝いをしてくださったりする方も出てきました。そこは少し前向きにとらえてもいいかな、と思っています。

**櫻井** 私たちの日常生活の中でも多いことかもしれませんが、あきらめに寄り添う、というのは難しいことです。こうしたことも、11年経とうとしている今のタイミングで考えないといけないことだと感じました。

浪江町の県外避難者に向けた支援事業は、浪江のこころプロジェクトや浪江町復興支援員事

業、タブレット事業など様々な展開がありました。復興支援員事業では、最大で全国10拠点に町の復興支援員を配置しました。復興支援員は避難した町民が約半分、避難先の方が約半分といった構成で、町民の避難先を訪問したり交流



配信会場の様子

会を開催したり情報を届けたりしてつないでいく事業でした。佐藤副町長はこの事業がピークだった頃に担当課長をされていました。

ただ、これらの事業は、2017年度を境に縮小し、今では、浪江のころプロジェクトと、タブレット事業の2つになっています。タブレット事業については、使う側の町民に役場からは関与できませんので、役場として県外避難者にかかわりを持つ事業としては、今では実質的に浪江のころプロジェクトだけになっています。

浪江町の復興の理念として、第1次復興計画の中で「どこに住んでも浪江町民」を謳いました。重要なキーワードである一方で、実際にそれを実現しようとする役場には大変なこともあったかと思えます。

**佐藤副町長** 震災から11年を迎える中、それぞれの避難先での生活が定着してきています。町にいたただくご意見も年々少なくなってきていて、役場から個々の皆さんの生活状況を把握するのが難しくなっています。

1月に町内で成人式を開催しました。震災当時、小学校3年生だった皆さんが成人を迎えたのですが、対象人数211名のうち参加は48名、出席率は22%でした。この年代はもう浪江に住んでいた頃の思い出よりも、避難先での経験の方が大きくなっています。こうした世代の皆さんに、町への想いを持っていただくのがだんだ

ん難しくなってきたと感じています。

もう1点、住民意向調査を毎年行っています。今年度の回答率は約50%でした。帰還への意向については、ここ数年ほぼ変化がなくなっています。50%の方から回答があるということですが、まだ町への関心を持っていただいている、ということがではないかと捉えています。

昨年4月の広報に「町長への手紙」の様式を同封したところ、町への提言、町長への励ましの言葉をたくさんいただくことができました。こうした想いを町政へとうとうつないでいくか、ということも課題と感じています。

**石井千葉** 浪江から千葉に来て11年になります。千葉で復興支援員を3年やった後に、県外にいる町民の声を届けていくために、町議会議員を1期務めました。今は、福

島県からの避難者の相談窓口において、浪江町民等の相談に対応しています。

浪江のころ通信について、最初は、取材を受ける立場でした。



ちば市民活動・市民事業サポートクラブ（千葉）  
石井 悠子 さん

取材の時、初めて通信について知りましたが、県外に行った方を取り上げる機会を町役場が作ってくれたのがうれしかったことを覚えてます。

通信の取り組みは、各地の皆さんが、避難者のころを文字で表していただいたことで、できたのだな、と改めて感じました。他ではない取り組みだったと思います。通信も、復興支援員事業も、外部の方が関わってきたからこそ伝わっていった面もあったのだと感じました。

町の復興について、目に見えるものは復興しているかもしれませんが、心のケアといった面ではまだまだだと思えます。役場に行っても誰も話を聞いてくれない、と浪江に帰った方から連絡が来たりもします。実際、役場に何か相談しても、あ、それは何課ですね、とすぐに回されてしまう。そうではなく、皆さんも話を聞いて欲しいのだと思えます。もう少し心の部分を大切にしたいと思えます。

**櫻井** 人は、あの人なら話してもいい、信頼できる、という相手に近づいていくものです。心に寄り添ってくれる身近な存在が少なくなっているというのは、避難先でも町に戻ってもあるのだと感じました。

人がどうしたらこだわりを持ってくれるかというの難しい問題ですが、相手方に知っている人がいる、親しい人がいる、といったことは大きな要素です。一方で、役場職員の約6割が

震災後採用となっており、町民の顔を知っている職員が少なくなっているのも事実です。役場と町民の関係が変わっていく、そういった現実が見えて来ている、ということだと思います。

## ◆浪江のこころプロジェクトの11年間

**櫻井** これまで浪江のこころプロジェクトでは、毎月の広報紙に掲載した通信を「総集編」としてまとめた冊子を過去2回、3年目と6年目に発行してきました。プロジェクト終了にあたって、最後にもう1回、令和4年度に冊子を発行し、プロジェクトとして次につながる終わりをしたいと思っています。

11年間の活動をふり返る意味からも、取材協力者の皆さんから、関わってきたの想いや課題と感じていることなどをお話いただければと思います。

**宮道(沖縄)** 震災直後に櫻井先生からお声がけいただき、プロジェクトに参加させていただきました。その経験は、沖縄に避難されている当事者の方のNPOと一緒に福島県の相談事業を実施することにもつながっています。

皆様のお話を伺う中で、11年という時間の流れの中で、それぞれの生活であったり、子どもたちの成長であったり変わっていく部分がある

一方で、心の中で変わらないうこともたくさんあるのだらうな、と感じました。

帰還した方だけではなく、福島県外に暮らしている方の中にも、話したいことを話せない状況があると思います。福島のこと、浪江のことを話したいときに話せる、そうしたコミュニティを残していくことが大切なのだと思います。

**下地(沖縄)** 沖

縄では、4件の取材を行いました。その後皆さんどうされているかな、と思いがら今回参加しました。取材活動を通して、浪江町について知るこ



まちなか研究所わくわく (沖縄)  
下地 美香 さん



まちなか研究所わくわく (沖縄)  
宮道 喜一 さん

とができ、また、取材を受けていただいたみなさんの浪江町に対する思いや、抱えていらっしゃるお気持ちなどお話をいただいたことに感謝しています。

先日沖縄のテレビ局が、沖縄を離れて他県に移られた方を取材していました。沖縄で学んだ織物を今でも続けられていること、浪江町の方と集う場をされていることが放送されていました。場所は変わっても、同じふるさとについて話せる場があることは、心の拠り所になっていくのだらうと感じました。

**彌永(福岡)**

浪江町復興支援員事業の福岡拠点として、岐阜県から沖縄県まで25府県の方にお会いすることができ、それをもとに、浪江のこころ通信についても広域で取材の機会をいただきました。このご縁から、九州で地震・大雨・台風等の被害があると、町民の皆さんから今でもお電話等いただくことがあり、ありがたく感じています。

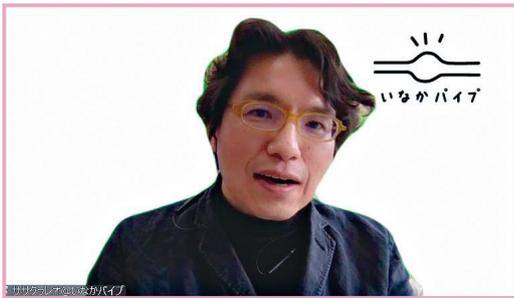
どこに住んでいても浪江町民という温かい言葉に、遠方へ避難した町民の皆さんは励まされてこられました。ですが、この言葉ですら、時間が経つとさみしい響きになっていきました。当初はみんな厳しいけどみんなでがんばろう、ということだったのが、次第に、町に帰らず・帰れず遠くにいる自分が故郷を裏切ったかのようにならぬ、自分を責めたり、懐かしい同郷の方々とのお付き合いを避けて、そっと過ごす方



つなぎ t e おおむた (福岡)  
彌永 恵理さん

九州にも原子力発電所があります。福島で大きな事故が起きたにも関わらず、こちらでは関心が高いとは言えません。取材を通じて町民の方々の生の声をお聞きし続けてきたので、一度事故が起きるとどうなるのか、九州の方に知っていたら良かったと思うので、九州各地のイベントも行いました。

もいらしたほどです。帰れるのであれば帰りたい、帰ったら今度はみんなと一緒に頑張りたいから待ってほしい、そんな声にできない思いをこころ通信を通じて伝えてくれたのに、このプロジェクトが終わるといことを大変残念に思っています。復興支援事業が大幅縮小された後に取材した先では「なんだか見捨てられたような気がする」という声もお聞きしました。あきらめる想いに寄り添うということが先ほど言われました。まさに、取材は傾聴でもありました。思わず一緒に涙してしまいそうなあきらめの言葉にも、避難先への永住を決断された踏み切りの言葉にも、「ふわっと」寄り添うことが大切なのだと感じました。



いなかパイプ (高知)  
佐々倉 玲さん

高知県内、愛媛県内の取材をしました。通信の取り組みを通じて、浪江という町を知ることができました。普段は農山漁村の中間支援をやっています。その立場から見ると、今の浪江の状況は、きつ

ントで毎年浪江の写真展をしたり、浪江にあった障害者就労支援施設の商品を仕入れて販売したり、震災から5年目の3月11日にはNHK福岡のスタジオ中を浪江の花で飾ってもらい、浪江の復興の陽の当たる部分と影の部分という両側面を伝えてきました。一人でも多くの人に、被災を、そして広域避難を自分事として捉えて欲しいと思っています。

**櫻井** 被災された方のためというだけではなく、今回の教訓を次に繋いでいくという面も含め、多角的な視点からこの事業を評価することができると感じました。ありがとうございました。



ひろしま市民活動ネットワーク  
HEART to HEART (広島)  
竹内 瞳さん

データはどう活用していくか、それぞれ町の民の皆さんの生の声、変化していく想いを、このプロジェクトだけで保管するのではなく、共有できるデータとして残していけ

かけは別にして、過疎地域と似ていると思います。人口は過疎地域と同じなのに、イオンもあるし、ハード整備もすごいと思います。そこにどう人をつないでいくのか、帰れない人をどう巻き込んでいくのか、といった点が大切なのだろうと感じました。

**竹内(広島)** 広島で中間支援の活動をしている関係で、プロジェクトに参加するようになりました。取材の件数はそれほど多くなかったですが、連絡を取ったり交流が続いたりしている方もいます。関わっている方が少ない分、個別の対応ができてきています。また、プロジェクトを通じて、広島県内の支援団体とのつながりもでき、有難いと感じています。

今後は、この取材を通じて集まった膨大な

たらしいのに、と思っっています。広島では、被災の体験等を今でも研究しています。町の事業としては終わってしまったても、息の長い活動も必要なのでは、と感じているところです。

**石井千葉** 事業は始まりも大切ですが、終わり方も大事だと思っています。復興支援員がいて、こころ通信があつてうらやましいと他の町の方から言われる位だったのに、ともになくなってしまう残念です。

皆さんの想いを聞き取った文章をきちんと残していくこと、次の世代に伝えていくことが大切だと思います。それは、今日参加されているような全国の皆さんの協力でできてきたのだという事は、今後も伝えていきたいと思っています。

**鍋嶋千葉** 福島県外にいて帰りたいと思っっているけど帰れない方々も、浪江に戻られた方も含めて、どこにいても浪江町民とは言えなくなっているかもしれないが、浪江のことを大切に思う気持ち、浪江町民としての誇り・プライドといったことを持ち続けていたいただきたいと感じました。

町役場の6割が震災後採用という状況の中で、役場に電話してもそっけない対応をされたとか、対応が冷たいとかいうことが聞こえてきます。町外にいる人たちの想いを、役場がうまく受け止めきれないのではないかと思います。福島県外で開催されている懇談会や交流会には、

町長や幹部クラスの方がいらっっしゃいますが、そうでない一般職員の方も一緒に来てもらって、町外にいる町民の話を聞く機会があつてもいいのかな、と感じました。

**松田(福島)** 震災の2週間前に当法人の設立登記が終わって、すぐに震災が来てしまい、気が付いたら11年経ってしまいました。当初から避難された浪江の皆さんとともに歩んできた団体とも言えます。

浪江のこころ通信と、当法人が独自で発行してきた「おたがいさま新聞」の取材を通じて、多くの浪江の方のお話を聞いてきました。その中で、町民の皆さんの考えや想いをよく知ることができたのは当法人にとって大きな財産となりました。取材した当時、まだ子どもだった皆



市民公益活動パートナーズ(福島)  
松田 英明さん

さんが、今どうしているかな、などと考えたりもしています。「3・11を忘れない」ということがよく言われますが、最近、本当に忘れないことが大事なのか、心にひっかかることが増えてきました。先

日お話を聞いた方が、町外に自宅を再建したが、未だに賠償金のことを言われる、とおっしゃっていました。10年経つても言われて本当にいやだと。

被災者の方がゆるやかに、心おだやかに忘れていく、ということも大切なのではないでしょうか。浪江に帰れない自分を責めるということも含めて、無理して頑張らない、心の負担をなくせないのであれば、おだやかに風化させていくことも大事なのではないかと思います。

浪江のこころ通信は、そうしたことを吐き出していく場として、十分機能してきたと思います。それがなくなってしまうと、これからどういう場が必要か、行政がやると固くなってしまいうちもあるかもしれないので、私たちのようなNPOが間に入ってできることもあるかなと思っ

ています。当法人としても、今後は、震災の支援とはちよつと方向性を変えて、中間支援の方にシフトしていく予定で、長く寄り添って伴走していく支援を続けていきたいです。ここで縁が切れるということではなく、今後とも引き続きよろしくお願ひします。

**古山(福島)** この浪江のこころプロジェクトは町と民間の協働で11年、浪江の町民の皆さんの生の声を聞いてきました。このプロジェクトに関わつた多くの人たちに、敬意を表したいと思っ



復興ボランティア支援センターやまがた  
(山形の公益活動を応援する会・アミル) (山形)  
結城 健司さん

このプロジェクトや、復興支援員事業を通じて浪江町の皆さんとの関わりがありました。山形県内には、浪江町の方が多くいます。道の駅なみえに入居された鈴木酒造店さんは、山形県長井市にて、頑張っ

て操業を続けています。

### 結城(山形)

取り組みはなかったと思います。当法人もまた、浪江町民の方々と多くの繋がりを持って活動してきました。私たちも被災者なので、より大きな被害に遭われた方の声を聞きたいということもあつたかもしれません。当法人の事業として情報紙「おたがいさま新聞」の発行を続けてきましたが、一定の役割を果たしたと判断して令和3年秋に終了しました。今、さらに浪江のこころ通信の活動がなくなると、浪江町民の方々と直に接する機会がなくなってしまう。これからどういうサポートをしていけるのか、浪江の方が町内外で活動する、組織を立ち上げるといったことがあれば、またお手伝いできるかな、などと思っています。

こころ通信は、毎月、届くのが楽しみでした。なくなってしまうことにさみしさも感じます。

私は取材は1回だけでしたが、避難先の高畠町のチームと浪江町民のチームとでソフトボールの交流試合をしている様子取材しました。

山形市内では、毎月「浜通り交流会」という名称で、浜通りから避難された方の交流会が続いています。大堀相馬焼の教室を何度かやったりしました。

ハードの復興は、予算を投入すればなんとかなるかもしれませんが、地域の文化芸術やスポーツ、住民活動のようなことについては、人の手がないと継承できません。浪江には、すばらしい文化がたくさんあると思いますし、山形にもそうしたことに興味を持っている人もいます。帰還する人口だけでなく、ファンを増やしていく活動、交流人口・関係人口を増やしていくことも考えていって欲しいと思いました。

### 畠山(秋田)

様々な事業が終了してしまうことは仕方ないことだと思えますが、事業が終わりませんでしたので、支援も終わりですというわけにはいかないのです。こころ通信や拠点の事業でつながってきた人の物語を受け止める活動は続けていきたいです。ただ、そうして聞き取った様々な想いを、徐々に専門的なところにつなぎながらも、私たち支援者がこの後、どう役割を果たしていったらいいのか戸惑いもあります。自立と言っても、1人でできることではないし、ど

こにどうつなげていくのか。

「高齢になって誰も話してくれる人がいないよ」とか「いくら町内会に入っても、福島から来たと言えないんだよね」という男性も結構います。支援者としてというよりは友人として、という感じになるかもしれませんが、たまに手紙を書いたり、電話でお話したりしていくことで、役に立つのであれば、今まで関わってきた者の役割として続けていきたいです。

### 青木(宮城)

プロジェクトが始まる当初、取材をさせていたいただいたり、東北圏地域づくりコンソーシアムの事業を通じて避難者支援事業に参画させていただいたりました。

町の復興レポートにあるような復興の姿に映っていないことの大切さを、皆さんのお話の中から聞くことができました。このプロジェクトを通じて多くの出会いがあったことに感謝したいです。



コミュニティ・ワークス (宮城)  
青木 ユカリさん

谷津(宮城) 宮

城県内でまちづくりや震災伝承関係の編集やライティング、市民ライターの講座の講師といった仕事をしています。

浪江のころ通信では3件取材活動を

させていただきました。平成30年以降の取材だったこともあり、皆さん長い不安定な生活を経て、生活が徐々に落ち着かれてきていた時期だったのか、新しい場所で先を見られている方もいらっしやっただのを記憶しています。

今日の議論を通して、町全体が過疎地域と言ってもいい状況の中で、今、浪江に暮らしている人がどう幸せに暮らしていくのか、そこに県外で関わりたいと思っている人をどうつないでいくかということも大切だと思いました。

佐藤(北海道) 一般社団法人北海道広域避難アシスト協会という団体で、道内避難者心のケア事業という北海道庁の事業を受託していました。そのご縁でこのプロジェクトに参加させていただいています。



Bottoms (宮城)  
谷津 智里 さん

浪江町からに限らず、北海道に避難された方全体の支援をしてきましたが、帰還というよりは、避難先でどう生活していくかを考えていた方が多かったと思います。浪江の方ではありませんが、定住先で地方議員になられた方もおり、地域に向けて色々提案される立場になられた方も出てきたのがこの11年だったと思います。私自身は、震災体験を伝えるということで、北海道防災教育アドバイザーの活動をしています。避難されている方との交流は減ってきていますが、北海道で商売を始められた方々には会いに行くことができます。

今は、心のケアを含めた活動を個人でやっています。札幌市中央区、テレビ塔のすぐ近くの古民家を改修して全体とカウンスリングができるコミュニティサロンを準備中です。人のつながりが希薄になった時に、集まれる場があることが大切だと震災を通して実感したので、北海道で暮らす人たちの憩いの場になればと思っています。



はっぴーでりっち (北海道)  
佐藤 伸博 さん

## ◆この協働のプロセスを次につなげていくために

櫻井 本日の議論の中から、「浪江のころプロジェクト」の経験を次につなげていく上で大切だと思ったことを3点お話ししてまとめたいと思います。

1つ目として、協働事業としての位置づけです。今回この区切りを迎えるにあたって、いろいろ考えることができました。なぜ通信を終わりにするのか。いろいろ理由はありましたが、一番大きかったのは、協働事業だからこそ、今終わる時であるということでした。

町や町民一人ひとりの復興は、やはり行政の責任として役割を果たすことが求められます。しかし、一般的に行政側に理念がなくなった時に、それでも民間で頑張ってしまうと、成果は何となくでき上がってしまうかもしれません。民間の頑張りが協働をだめにしてしまうと言ってもいいかもしれません。くり返しますが、震災復興はやはり行政の責任として、行政が役割を發揮することに意味があるということです。

とはいえ、役場が悪いと言っているわけではありません。職員の6割が震災後採用ですから、例えばこのプロジェクトをなぜ始めたのか。どのような想いで始めたのか。何のために始めたのかを語る職員はもういないと思いま

す。さらに言えば、こころ通信を始めた時の担当者は、早期退職でもう役場にはいません。決して役場職員の皆さんが悪いわけではない。11年という年月がそうさせたのだということですね。行政との協働事業である以上、行政側に商機や理念がなくなったら、その事業は終わりを迎えるのだと思います。そうした区切りを迎えないといけないということです。ただし、復興は道半ばです。町役場としては次に進んでいくための方策を別の形で考えていかなければなりません。

2点目としては、民間の支援組織側への教訓です。このプロジェクトで得た経験を私たち民間側も次に活かしていくべきだということですね。復興支援員事業も浪江のこのプロジェクトも、全国各地の中間支援組織・NPOが参画して初めて実現できた事業です。この民間側の出会い・つながりといったこと、支援組織をネットワーク化し、ノウハウを共有していくことが、今後の日本の人口減少社会を支えていくためにとても大切になっていきます。

NPOも競争の世界であり、指定管理事業に参入した中間支援組織だけが生き残っていく、そのことで結果的に行政にコントロールされていくという姿が各地で見え隠れしています。これからはそうではなく、支援団体が横につながりノウハウを共有していくことで、みんなが同じ目標に向かって進んでいく。民間側の新しい動きを作り出していく時期に入っていると思

ます。このプロジェクトは、こうしたことを実現したわけですが、このノウハウを次の教訓として活かしていくことが大切であると思っています。

3点目は、浪江町の復興に向けて人びとのこだわりをどう育んでいくのかです。これは私見ですが、東日本大震災の中でも特に浪江町のよな原発事故被災地に求められることは、浪江に住む人たちがだけでなく、浪江にこだわる人をどう増やしていくかが大切だと思っています。そのためにはいくつかの方策がありますが、このプロジェクトでは浪江を語ること、あえて言葉にすることを大切にしました。自らの言葉で発する、文字に残していくことによって、その人自身にこだわりが生まれます。東日本大震災をめぐることは、日本社会全体としてこうしたこだわりが少しずつ薄れていっています。様々な課題が起こっても行政まかせということも増えています。こうした状況を変えていくためにも、今回の経験を大切にしていきたいと思



参加者の皆様